

◆鎖国体制崩壊の足音

泰平の眠りを覚ます^{*1} 上喜撰^{*2} たった四杯^{しほ}で 夜も眠れず
江戸時代末期、アメリカ・フィルモア大統領の書簡をたずさえたペリー艦隊、いわゆる「黒船」が日本に来航した際、そのような狂歌が詠まれた。

泰平の眠り——江戸幕府二〇〇年にわたる平和は、幕府が成立して間もない十七世紀中ごろに成立した鎖国体制によって保たれていた側面が強い。外国との交流を制限することで、熾烈な植民地獲得競争に乗り出していた欧米諸国との間に、距離がおかれていたからだ。

しかし十九世紀前半、「泰平の眠り」の時代に、揺らぎが生じ始める。このころ、日本近海に外国の船が頻繁に姿を見せるようになっていた。長州藩・萩^{はぎ}に吉田松陰が生を受けたのは、まさにそんな時代のことであつた。

外国勢力の接近

外国船が日本近海に出没するようになっていた背景には、十八世紀後半にイギリスで起こった産業革命がある。欧米諸国では工業生産が盛んになり、さらに軍事力も近代化したため、市場を求め、また原料を安く手に入れるために、アジアへの進出が活発化したのである。巨大蒸気船・黒船はまさに、産業革命の産物だった。

文化元^{ぶんか}（一八〇四）年には、ロシア使節レザノフ^{*3}が長崎に来航し、通商と外交を求めた。幕府は、鎖国は「祖法^{*4}」⁴だとしてロシア側の要求をはねのけた。そのため、樺太^{かほふと}や択捉島^{えとまとう}を攻撃されてしまう。四年後の文化五（一八〇八）年にはイギリス軍艦フェートン号⁵が長崎に侵入してオランダ商館員を人質にとり、燃料と水、食料を要求。要求を受け入れなければ港内の船を焼き払うと脅すフェートン号事件も起こっている。

幕府の対応

もつとも幕府も、外国の脅威に対して、ただ手をこまぬいていたわけ

*1 上喜撰

黒船を指す「蒸気船」との言葉遊びになっている。「上喜撰」は高級な茶の銘柄。高級茶の眠気覚まし効果を、黒船（蒸気船）来航の衝撃に掛けている。

*2 フィルモア

一八〇〇〜一八七四 アメリカ合衆国第十三代大統領。一八五二年にペリー艦隊を日本に派遣。二年後の一八五四年には日米和親条約を締結し、日本の開国に成功。

*3 レザノフ

一七六四〜一八〇七 ロシアの外交官。樺太・択捉攻撃の帰途、シベリアで没した。

*4 祖法

祖先伝来の法。鎖国は十七世紀中ごろ、三代将軍・家光のころに確立。